

---

# 勇者さんの珍道中

黒星天魔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者さんの珍道中

### 【Nコード】

N9238X

### 【作者名】

黒星天魔

### 【あらすじ】

魔王討伐の使命を背に、勇者が今、動き出す！ ついでに、他の何か変なアレみたいな連中も。

1ページ目「勇者さん、旅立つ」(前書き)

題名：勇者さんの珍道中

著者：私

## 1 ページ目「勇者さん、旅立つ」

ある日、それはとてもいい天気の日のもので、魔王が現れたと言います。

「いきなりすぎて意味がわからないよ!? それにもっとちゃんと天気選べよ、魔王!」

「勇者さん、偏見で物を言うのはよくありませんよ。魔王だって、悪い天気よりはいい天気に現れたいでしょうし」

「いや、だって、ほら……イメージが……」

「イメージ? 勇者さんは人を外見ではなくイメージで判断するんですか? 最低ですね」

「そういう君は人を外見で判断するタイプなのか!? というか、魔王、人じゃないし……」

「あ、そうそう。ツッコミはいいですけど、勇者さん、その調子でツッコミばかりしてたら、ツッコミだけが取り柄みたいな、そういうキャラ付けにされてしまいますよ」

「誰に!?!」

「もつとも、ツッコミをしない勇者さんに用はないんですが」

「一体何が目的なんだよ!?!」

「世界征服」

「君、魔王だったの!?!」

「冗談です。正しくは、世界制覇」

「どう違うんだ!?!」

「世界征服は、世界の全てを自分の物にすることで、世界制覇は、世界の全てに勝つことです」

「どっちも壮大すぎるよ!」

「世界をどうとでもできる力がほしい」

「神になりたいと!?!」

「ま、その役は勇者さんに任せますよ」

「任せられても困るよ！」

「殺伐とした世の中にするもよし、犯罪が少しでも減った世の中にするも良しです」

「犯罪は全部なくそうよ！」

「そんな絵空事、現実を見てから言ってください」

「君もね！」

「はあ、疲れた」

「いやいや！ いちいちツッコミ入れてるボクの方が疲れるよ！？」

「いちいちツッコミ入れるからじゃないですか」

「君がいちいちボケるからだよ！」

「またそうやってすぐ人のせいにする。昔からの悪い癖ですよ」

「さも昔からの知り合いみたいな言い方してるけど、ボクと君が出会ったのは今日だからね！」

「アレですか。勇者さんは幼馴染としか仲良くしないクズ野郎ですか」

「何でそうなの！？」

「そんなに昔の女がいいんですか。私の何が不満なんですか」

「やめて！ 付き合ってるみたいな言い方やめて！ さすがに誤解されるわけないとは思っけど万が一にも誤解されたら嫌だからやめて！」

「え……そんな力一杯、否定しなくても……」

「……え、あ、う……ごめん」

「何マジになってるんですか？ 何マジに期待してるんですか？」

「……………」

「さては、勇者さん」

「……な、何だよ？」

「勇者さんって、割とチョロイですね」

「チョロイとか言うな！」

「ちよつと触られただけでも勘違いしちゃうようなタイプですよね」  
「ちよつとの度合いがよくわからないんだけど……仮にドキッとは

しても、勘違いまではしないよ!」

「ちよつとの度合いは……例えば、肩と肩がぶつかったときとか」

「普通に謝るよ!」

「本当ですか? 相手が物凄く可愛い子でも?」

「……いや、そりゃ、ドキッとはするかもしれないけど……」

「可愛い子じゃなきゃダメって、勇者さん、何贅沢言ってるんですか?」

「今そういう話じゃないだろ!?」

「そもそも、勇者さんって、あまりモテそうには見えませんしね」

「どういう意味だよ!?」

「そのままの意味です。女ウケしないタイプというか」

「女ウケ!? ウケないとモテないの!?」

「でも、別にいいじゃないですか。男ウケするタイプ何ですし」

「ウケたくねえ!」

「これから先、きっとそういう展開があると思いますが、私の前ではイチヤイチヤしないでくださいね。気持ち悪いので」

「そういう展開は絶対にならないので安心してください!」

そんなこんなで、勇者さんと私の旅が始まったのであった。

「結局それ、全然意味伝わってないから!」

素晴らしいオチをありがとうございます。

## 1ページ目「勇者さん、旅立つ」（後書き）

感想：妙なもん書くな！

何勝手に読んでるんですか。

2ページ目「7人の勇者」(前書き)

題名：冒険の書

著者：アルク



## 2ページ目「7人の勇者」

遙か昔、魔界より現れし魔王がこの世界を我が物にしようとした。野に魔物を放ち、手下の魔族に人の住む土地を襲わせ、人々を恐怖と絶望で支配していたという。そんなある日、魔王を倒すべく、一人の若者が立ち上がった。魔王を倒すための壮大な旅は、それはそれは苦難の道程であつたろう。しかし、若者は決して諦めなかつた。人々を助け、また、人々に助けられながら、長い長い旅の中でどんどん成長し、その勇氣ある行動は、やがて魔王を倒すに至つたのである。こうして、世界を救つたという素晴らしい伝説を残した若者は、勇者として、歴史にその名を刻んだ。というのは、今から千年も前の話だ。嘘か本当かも、現代を生きる一般人のボクでは知ることさえできない。

その日、ボクは珍しく自分一人で朝起きた。いつもは母さんに起こされてる。いや、起こされても寝ようと頑張つてるボクだが、そこはしょうがない。だって眠いんだもん。

夢を見たような気がする。千年前の、伝説の勇者と魔王の物語。残念ながら、内容はもう忘れちゃったし、覚えてたとしてもそれはボクの夢であつて、真実とは遠くかけ離れてる内容だつたろう。

まだ暗い室内で、カーテンを開けた。いつもは母さんにそれをやられて眩しいのが嫌いな吸血鬼のように苦しんでいたが、今日は違う。眩しいけど、何だかとっても、いい気分だ。

「……………」

いい気分、だつたのに。

窓の外には、城の兵士たちがズラリズラリと　　うわ何コレやばそう。

コンコン、と兵士の一人に窓をノックされ、ボクはしばらくボーっとして、やがてカーテンを閉じた。

ドンドン、と今度は強めに窓を叩かれる。何コレ……ボク、何か悪いことでもしたっけ？ 胸に手を当てて考えてみても、心当たりなんてなかった。昨日は朝から幼馴染のミュウの買い物に付き合われて、昼ごはんをミュウの家でごちそうになって、夜遅くなるまで適当にブラブラしながらミュウと会話してたぐらいで……うん、やっぱり心当たりはないな。平和すぎて城の兵士さんのお世話になるようなフラグなんて立つわけがない。これは悪い夢だ。きっとそうに違いない。

ドン！ と、やたら強い一撃が窓を襲った。今は本気でやばい。ボクの部屋の窓の強度の意外性にもビックリだが、これ以上はやばい気がする。強行突破なんてされるぐらいなら、大人しく窓を開け放ってやるうじゃないか。

だってボク、何も悪いことしてないし。

カーテン、オープン。

そして、窓、オープン。

「お前がアルクだな？ 城まで来てもらおうか」

まあ、そんなことがあつて、城へと連行されたボクは、てっきり牢屋にでもぶち込まれるのかと思っただけれど……なぜだろう 今、王様の前にいる。

けど、ボク一人というわけではなかった。右に三人、左に三人。鎧やら兜をフル装備した方々が、ボクと同じように立っていた。顔は兜で隠れてて見えない。まるで同じ鎧がズラリと並べられたみたいで、何だか薄気味が悪かった。

「よくぞ集まってくれた、7人の勇者たちよ」

王様が唐突にそんなことを言い出した。

……勇者？ ……7人？

ボクと左右の鎧の人たち、合わせると ちょうど7人。偶然では済まされない。というか、王様の視線は明らかにボくらの方。周

りで整列している兵士たちの視線も、残念ながら、ボクらの方だった。

「話は既に聞き及んでいるとは思うが、魔王が復活したという噂が徐々に広がりつつある」

……聞き及んでません。

魔王？ あの伝説の勇者に倒されたという？

「そこで諸君ら、勇者の力を受け継いだとされる7人の勇者に命ずる！ 今こそ、その力を世のため人のために示すときじゃ！ 7人の力を合わせ、復活した魔王を倒してまいれ！ 見事魔王を倒した者には、わしの娘を嫁にやろう！ もちろん、王位も譲るつもりじゃ！ とうか何でもやるからとにかく適当に頑張ってくれい！」  
適当につて……。しかも、力を合わせ と言ってるのに、それじゃあ、魔王を倒した者つて誰になるんだよ……。

とうか、何で、え……？ 勇者？ ボクが？ ボクと隣の方々が？ 何ゆえに？ 意味がわからないよ……。

……とうか、ボク、まだパジャマだし……。

城から出るまで、ボくら7人の勇者（？）は兵士たちの敬礼と視線を浴びせられ続けた。

夢なら早く覚めてくれ……。

それにしても、鎧の人たちは何も喋らない。ひよっとしたら兜に防音効果があるのではと思わされるぐらい、何も話そうとはしなかった。不気味すぎる……。

城を出て、城下町へと続く橋を渡ったところで、ボクらは立ち止まった。

「どつとも」

……明らかに待ち伏せていたような 全身をローブで隠した上に、カラフルな旗がたくさん刺さってるという怪しすぎる格好の人

が、そこにはいた。声は女性のものだったが、怪しいことに変わりはない。

「私は怪しい者ではありません」

「その格好で言っても説得力ないよ！」

いきなりの真正面すぎるボケを、思わずツツコんでしまった。

王様にさえツツコミを入れたくなったボクだが、それでも頑張つて我慢してきたのに、とうとうツツコミを入れてしまった。

負けた気がするのはなぜだろう。

「いえ、この格好は違ふんです」

怪しい女はたいして慌てる素振りもなく、極めて冷静に、しかし、どことなく楽しそうに言う。

「王宮道化師のバイトをしてまして」

「バイト！？ 王宮の仕事がバイト感覚でできちゃうの！？」

あの王様ならアリかもしれないと一瞬思ってしまった。

「本職は、一応、戦士みたいなことをしてるんですが、この国は、なんというか、平和すぎてロクに依頼がなくてですね ああ、依頼とか言ってもわかりにくいですね。簡単に言えば、魔物退治とかそれ系のことです。そういうのがなくて、戦士系の職業の人は全然稼げないんですよ。そこで思いついたのが、王宮道化師として雇ってもらおうという」

「思いつくのが王宮道化師って無理ありすぎない！？」

「そうですね？ 城って、たくさんお金ありそうじゃないですか。というか、城ってお金でできてるんでしょう？」

「城は石製だよ！」

お金を使って作られた という表現のことを指すんなら、完全に間違いではないけれど……。

「まあそんなわけで、この格好は王宮道化師をしていた頃の 名

残り、ですかね」

「名残りという言葉をそんなことに使わないでほしいな……」

「そういう君も、人のこと言えないような格好ですけどね」

「いや、これは……」

朝起きてすぐ拉致されたのだから、パジャマ姿でもしようがないじゃないか。

「趣味の悪いパジャマですね」

「そこ！？ え、趣味悪い！？ どの辺が！？」

「可愛らしいわけでもなければリアルでもないただ怖いだけの熊の辺りが」

「熊じゃないよ！ 犬だよ！」

「え……」

「素でわからなかったのか……」

……まあ、確かに、熊に見えなくもない。最初見たときは、ボクもこのデザインに驚かされたが、慣れてしまえば芸術的でさえ思えてくる。熊カツコイイ。あ、違うや。犬カツコイイ。

とかなんとか、元王宮道化師の女戦士と話してる間に、鎧着た6人の勇者がいつの間にか5人に減っていた。

それに気づいたとき、もう一人が先に行ってしまった、残り4人。そりゃ呆れもするよ……。

「そうそう。私がどうしてこんな所にいたのかと言うと、実は7人の勇者さんにお話しがあつて待ち伏せていたんですよ」

「もう5人しかないよ！ 何でもっと早くそれ言わないの！？」

「この程度のギャグについてけないようなクズ勇者に用はありません」

「ギャグ！？ クズ勇者！？」

敬語を使ってるからと言って、それが汚い言葉だと意味がない。

というか、破壊力が増しているような気がする……。

あ、また一人去った。

「大体、勇者ともあるうものが、7人掛かりで魔王を相手にすると

というのが気に入りません。あなた方に誇りというものはないんですか？ 恥を知りなさい」

「……うん」

一見、正論のような気もするが、この人にだけは恥を知れとは言われなくなかった。

今の発言で二人が去り、残るはボクと鎧の人が一人だけ。その鎧の人も、去って行く人たちを見てあたふたと落ち着かない様子だ。たぶん、自分も行きたいのだろうが、なかなかここを去る勇気が出ないのだろう。

「言い過ぎましたかね。クズ勇者と言っても、鉄クズと一緒にではないので安心してください」

「それ謝る気ないよね！？」

最後の一人が、申し訳なさそうにこちらを見て、手を合わせて頭を下げる動作までして、走るようにしてこの場を去っていく。

さて、とうとうボク一人になってしまった。

何でボク、最後まで残ってるんだろう。

「では、勇者さん。あなたの旅に、私も同行させていただきます」

「誇りはどうしたの！？ 恥は知らなくていいの！？」

「何言ってるんですか、勇者さん。恥も誇りも、命には代えられませんが。相手は魔王ですよ？」

「ボク一人残ったところでそんなこと言われても説得力なさすぎだから！ ……というか、ボク、やっぱり旅に出なくちゃいけないのかな……」

未だに自分が勇者だという自覚がない。

というか、王様の勘違いという可能性もあるし……。

女戦士は、表情こそローブの頭巾に隠れて見えないが、たぶん、微笑を浮かべながら、こう言った。

「それは、あなたの決めることです」

意外な言葉に、少し驚いた。

何だ、まともなことも言えるんだな、この人。

ボクがもし本当に勇者だったら……魔王が復活したというなら……世のため人のため、旅に出た方が正しいのかもしれない。だからと言って、一般人として過ごしてきたボクが、いきなり勇者だと言われたぐらいで、旅に出なきゃいけないなんてことはないかもしれない。

どちらが正しいのか、どちらが間違いなのか、すぐには判断できないけれど　それでもボクは、決断すべきなのかもしれない。

勇者として　というよりは、人として、迫られた選択は、いつか、いずれ、きっと、選ばなきゃいけない　そんな気がした。

「……と、とりあえず、今日のところは家に帰ろっかな……。母さんとも、ちゃんと話したいし」

「わかりました」

「……ん？」

そこでなぜか、腕を掴まれた。

「そんなに今すぐ旅に出たいのですか」

「え？」

「さすがは勇者さん。家族との別れも必要としないとは、勇者としてこれほどカッコイイ決断はありません。あなたにはちゃんと誇りがあるような気がしてきましたよ」

「え、ええーっ!？」

「さあ、行きましょう。確かに、あんなクズ勇者共に先を越されるわけにはいきませんからね　勇者さんの言葉の裏には野心すら感じますが、そんなあなたを私は尊敬の念すら抱かざるを得ません」

「ちょ、ちょま　」

「私なら大丈夫です。しばらくは王宮道化師の格好のままの旅も良いでしょう」

「ボクが嫌なんですけどー!？」

そんなボクの訴えにも耳を貸さない女戦士は、親に別れすら言え

ない上にパジャマを着たままのボクという勇者（？）を強引に冒険の旅へと引っ張り出したのであった。

「言い忘れました。私の名は、ハーシェリーと言います。気軽に女戦士とでもお呼びください」

「せ、せめて武器だけでも買わせてー！！」

残念ながら、ボクの必死の叫びは、何もかも、彼女の耳には届かなかった。



## 2ページ目「7人の勇者」（後書き）

感想：未だに意味がわからない……。  
自分で感想書いてどうするんですか。

自分が文章書いたのに

3ページ目「勇者さん、学ぶ」（前書き）

題名：勇者さんの珍道中

著者：私      何で名前書かないの？

### 3 ページ目「勇者さん、学ぶ」

勇者の冒険における最初の試練とは、スライムと戦うことだと私は思っています。

「……いや、ボク、武器すらまだ持っていないんだけど……」

「大丈夫。スライムなら探せばすぐ見つかります」

「いやそういうんじゃないくて……見つける!？」

「はい」

「どうして!？」

「あれ? もしかして勇者さん、知らないんですか?」

「え、何が……?」

「ほら、昔は魔物が人を襲ってたでしょう?」

「うん。そう聞いている。……って、まさか……!？」

「ええ、今は人が魔物を襲う時代なんですよ」

「どうして!？」

「二回目ですよ、その台詞。少しは自分で考えたらどうですか」

「え……うーん……う、腕試し、とか……?」

「はあ……これだから子供は嫌いです」

「ひ、ひどい……。し、しょうがないだろ!？ 傲慢じゃないけど

ボク、めちゃくちゃ世間知らず何だよ!？」

「威張って言うことですか。これだから田舎者の子供は<sup>ゆとり</sup>」

「悪口が増長した……」

「いいですか、勇者さん。そもそも、千年前に魔物が人間たちにしてきたことを考えてみてくださいよ」

「ああ、えっと……襲ってたってことは、その……やっぱり、身ぐるみ剥いだり……」

「言い方がぬるいです。身を剥いだぐらいは言ってほしいものですね」

「怖すぎる!」

「まあ、簡単に言えば、襲われた人間は大抵の場合、死にます。助かりません」

「そ、そうだよね……やっぱり……」

「襲う理由は色々ありますが、一番わかりやすいのが、彼らの王魔王のためですかね。でも、それはただの建て前であって、連中の本音は、人間を餌として食べただけだと思いますよ」

「ひ、ひどい……」

「そうですね？ 私たち人間だって、命ある動物を殺して食います。その動物だって他の動物を食べたりします。弱肉強食、食物連鎖。それが自然界の摂理というものです。ひどいと思う方がよっぽどひどいですよ」

「……言ってることは間違ってると思うんだけど、ボクにはまだよくわからないよ……」

「子供という特権を活かして逃げようとしなくてください。勇者さん、あなたはちゃんと成長しないといけません。もう二度と、同年代の子供たちと同じ立場だとは思わなくてください。勇者とは、人々を導く存在なのですから」

「……努力、するよ」

「努力、ですか。あまり良い返事とは言えませんが、今のところはそれで許しておきますよ。さて、話を戻しますが、魔物が人を襲う理由と人が魔物を襲う理由にたいした違いはありません」

「……へ？ どういうこと……？」

「人は人のために魔物を倒す　というのが建て前で、本音は餌として食べたいだけです」

「ええーっ！？ 魔物を食べるの！？　というか食べれるの！？」

「本当に田舎者丸出しですね。食用の魔物だってそりやいますよ。腹が減った旅人はその辺の食える魔物を自分で狩って食べるんです」

「えー……何か急に原始的な話になってきた気が……」

「もちろん、欲望の塊である人間が、ただ食うことだけに留まるはずありません」

「……と言つと?」

「金になります。食用としてはもちろん、毛皮とか角とか、用途は多岐に渡りますが、色々なアイテムになります。生きたまま欲しがる人もいますが、これはペットにしたり、こき使ったりするのが目的かと思われます。いやはや、人間って素晴らしいですね。本当、色んな意味で」

「そ、そうだね……」

「というわけでスライムを襲います」

「……えっと、それ聞いた後でもちよつとよくわからないんだけど……スライムって、食べれるの?」

「はあ? 勇者さん、あんなのが食べたいんですか?」

「あつれー!?」

「パジヤマの趣味が悪ければ食べ物の趣味も悪いんですね」

「パジヤマ関係ないし! それに食べれるかどうか聞いただけじゃん!」

「食べれるか食べれないかと聞かれれば　そうですね。まあ、一部の人を除き食べれませんけど」

「一部の人!?」

「ゲテモノ食いマニアとか」

「いや、それでもさすがに食べれない物までは食べないと思うけど

……」

「勇者さんのような奇特な人とか」

「もうやめて!　というかボク魔物自体食べたことないし!」

「まあぶつちやけ、普通は魔物なんか食べませんけどね」

「って結局嘘かよ!　ぶつちやけるタイミングが遅すぎる!　ちょっと信じちゃってたし!」

「まあ食べる食べないはともかくとして、早くスライムを見つけて倒しましょう」

「……だから、どうして?　捕まえたりするの?」

「いえ、殺しますけど?」

「あつさり言うなあ……。スライムって何か悪いことでもする魔物なの？」

「あんな弱い魔物に悪いことなんてできるわけないでしょう」

「じゃあ、何で……？」

「古来よりスライムは初心者に倒される運命と決まっています。そういう敵キャラなんです。彼らも役割を果たせるなら本望でしょう。さあ、レッツハンティング」

「いやいやいやいや！ 頼むからやめたげてよ！」

「さつきから何ですか？ まさか勇者さん、戦うのが怖いからそんなこと言ってるんじゃないでしょうね？」

「違う意味でだけどね！ 特に実害もないような相手を、魔物だという理由で殺すことなんて、ボクにはできない」

「ほう。では、実害があれば殺せるんですね？」

「え……いや、でも、スライムは悪いことできないって……」

「嘘です。スライムはえーと人間を溶かして捕食としますよ」

「その発言が嘘だろ！」

「え……何で、わかつたんですか……？」

「君の言うことは大体が嘘だということをボクは学んだよ……」

「いや、私が学んでほしいのは戦闘経験ですよ。スライムと戦って、少しでもレベルを上げなくてはなりませんからね」

「……腕試しって答え、ぶっちゃけほとんど当たっちゃってるよね、それ……」

まあ、乗り気じゃない勇者さんのこと、初めから期待などしてませんでしたが、この分だと、実害のある魔物を探す必要があります。です。

「どこかに襲われてる村とかありませんかねえ」

「物騒なこと言うなよ！」

今回も素晴らしいオチをありがとうございます。

### 3ページ目「勇者さん、学ぶ」（後書き）

感想：ボクとの掛け合いしか書かないんだね……。      ストーリ  
Iの方は勇者さんに任せます。

4ページ目「スライム」(前書き)

題名：冒険の書

著者：アルク



#### 4ページ目「スライム」

元王宮道化師の女戦士　ハーシェリーと名乗った女性に、半ば強引に旅立たされてしまったボクは、今日、生まれて初めて、魔物というものを　スライムをこの目で見た。

どんなリアルなドロドロが出てくるのかと思えば……、

「……可愛い」

何とも愛らしい顔をした　とても小さな存在だった。

女戦士が言っていた　ペットにする人もいるというのは、案外、本当のことなのかもしれない。

「可愛い？　あれがですか？」

あからさまにひいてる感じの女戦士に、しかしボクは自分の感性を信じた。

「何というか……うん、この世のものとは思えない可愛さだね」

「まあ、本来は魔界にいた連中で、この世のものではありませんが」

「あんな可愛い生物を倒そうだなんて、まったく……ひどいよ、女戦士は」

「え？　女戦士は職業であって名前じゃないですよ？　勇者さん、そんなこともわからなかったんですか？」

「君がそう呼べて言ったんでしょ！」

「そうでしたっけ？」

「ほんの数時間前の出来事だよ……」

それにしても、朝から超展開が多すぎる日だ……今日はボクの超展開日だな。

パジャマ一枚というボクと、自称王宮道化師の格好な女戦士の旅立ちの日。

一体、どうやって魔王を倒すというのか　想像もつかない。

「そんなことより、早くあのスライム倒しちゃいましょうよ」

「さっきボクが言ったこと、覚えてる……？」

「はい。『ひれ伏せ、世界』、ですよ。勇者さんの痺れる名言はバッチリ記憶してますよ」

「そんな痛いこと言った覚えはないよ！」

どんな記憶の仕方したら、そんな捏造が入るんだよ。

「ああ、『世界よ、ひれ伏せ』の方でしたか」

「言ってること変わってないよ！」

しかも、それじゃあ、どっちも言ったみたいじゃないか。痛いにもほどがある。

「だから、ボクはスライムを倒す気なんてないんだって」

何の罪もないのに、どうして倒さなくちゃならないんだ。

強くなるためだからって、そんなの、弱い者いじめと何も変わらない。

「じゃあ、戦ってわざと負けたらいいじゃないですか」

「意味がわからないよ！？ 戦う必要がないって言ってるの！」

この人、どんだけボクを魔物と戦わせたいんだよ……。

「どうしても、嫌ですか？」

「しつこいなあ！ 嫌ったら嫌だよ！」

「スライムの方から襲いかかってきてても？」

「こっちから何もしなければ大丈夫だよ、きつと」

「試してみしよう」

「え？」

ボクが何かを考える前に、女戦士は既に行動を起こしていた。

「けぺっ」

端的に言って、ボクは蹴られた      んだと思う。

お尻痛いし。地面、顔打ったし。

スライムとは結構な距離を保っていたはずだけれど、その一回の蹴りでボクは目の前にまで来てしまった。

当然、スライムの方がビックリして、数歩後ろに下がっていた。

ゼリー状の体に汗のようなものが滴り落ちている。

「い、いきなりなんなの!？」

……喋った。

え……何これ……魔物って喋るの……？ 動物のように鳴くだけ  
と思ってたけど、今はっきりとボクの耳に届いてきた音は、完璧に  
人間の言葉だった。

「に、にんげん!？ あ、ああ、あなたにんげんじゃない!？」

「え……あ、うん」

慌て方が尋常じゃない。

まあ、それはボクも同じなんだけど……。

「こ、ころされるー!？」

「え!？」

「ころされる!？ あなたあたしをころさるきね!？」

「殺さる……？ い、いや、誤解だよ！ ボクは君を殺そうなんて  
気はないよ!」

「うそ!？ほんと!？どっちなの!？」

「ほ、本当だよ！嘘なんてつかない!」

「えええー!？じゃ、じゃあ……べつにいいや」

「……………」

さっきまでの慌てぶりが嘘のように、スライムはホッとして言っ  
た。

どうしよう 魔物のテンションがよくわからない。

どこからツッコめばいいんだ……。

「勇者さーん、独り言はいいですから早く戦ってくださいーい」

ゆつくりとこちらに歩いてきた女戦士がそんなことを言いだした。

独り言……？

「って、魔物が喋れるんなら早く言ってよ!」

ますます倒そうなどとは思えなくなつた。

どうやら話も通じる奴みたいだし。

「は……？ 何馬鹿なこと言ってるんですか？ 頭でも打ちましたか？」

「お尻蹴られて顔なら打ったけどね！」

今更だけど、凄く痛い。

痛いで済んでるのは、幸いだったのかもしれないけど……。

「またにんげん！？ あたしころさるき！？」

「殺さない殺さない！ 大丈夫だから……たぶん」

「ならいいや」

「……………」

こいつ、わざとやってるんじゃないだろうな……。

「ほら、今喋ったでしょ。このスライム」

「……勇者さん、すいません……」

「え……？」

「強く、蹴りすぎてしまったようですね、頭を」

「お尻だよ！」

謝る気ないな、絶対……。

「お尻お尻って何ですかさつきからレディーの前で。恥知らずもここまでくると変態ですよ」

「思いつき蹴っついてよく言うなあ……………」

「だから謝ってるじゃないですか」

「誠意が感じられない……………」

「はあ……服を脱げば、私の美しい裸体を拝ませれば、それで満足ですか？」

「脱がなくていいよ！ ボクを変態にしたいの！？」

「はい」

「即答した……………」

自分で美しい裸体とか言ってるけど、そんなに自信あるのかな……。

いや、もちろん、見たいとは思わないけどね！

「というか、話が進まない。

「話が進まなくてお困りですね。そんなときの便利な言葉がありますよ」

「その原因のほとんどを作り出してるって自覚はある……?」

「知りません、そんなもの」

「ですよー」

「それはさておき　つまり、閑話休題」

「それ、ボクが言った方がいいと思う……」

閑話休題。

ボクはスライムが人間の言葉を話してることを女戦士に告げた。

「というか、彼女の目の前でもしっかりと喋ってるのだから、言うまでもないと思ったのだけれど　どうやら、女戦士にはただ鳴いてるようにしか聞こえないらしい。」

「魔物の中には、確かに喋れるような珍しい奴もいますが、スライムが喋るなんて聞いたことはありませんよ」

「でも事実だし……」

「ちなみに、見た目通りに可愛らしい声をしている。喋り方からして、たぶん、メスのスライムだと思うけど　あれ、スライムに性別なんてあるのかな。」

「こんな間抜け顔のスライムが喋れるなら、猿だって喋れるでしょうに」

「間抜け顔!?!」

「ひ、ひどい!?!」

ボクに続き、スライムも一緒になって落ち込んだ。

このスライム、人間の言葉　ボクじゃなくて、女戦士の言葉もわかるようだ。

「ということは、スライムの声を聞き取れるボクの方がおかしいのかな……」。

「しかし、困ったことになりました……」

女戦士が顔に手を当ててそんなことを言い出す。

「困ったこと……？」

「はい」

なんだろう……あの女戦士が困るなんて。

「勇者さんがスライムと戦いたくないあまりにスライムが喋れるとか頭のおかしなことを言い出すなんて……」

「そろそろ信じてくれてもいいんじゃないかな!？」

そのネタでどこまで引つ張るつもりだよ……。

そりゃまあ、簡単に信じるなんてできないぐらい不思議なことがもしれないけど、それにしたって、少しぐらいは話合わせてくれるぐらいしてくれたっていいじゃないか。

そんなにボクが信用ならないのか……？

「お手」

「わーい」

女戦士が手を差し出してそう言つと、スライムはそれが条件反射のように手の上に乗った。

「勇者さん。このスライム、どうやら言葉がわかるみたいですよ」

「……ああ、うん……」

ボクの言葉は、どうしてこの人に届かないのだろう。

「む。ということは、勇者さんはこのスライムと話せるということですね？」

「さっきからずっとそう言ってるよね!？」

「俄かには信じがたいですが、今のお手を見る限りでは、どうやら

嘘ではなさそうですね」

この人、言葉よりも、行動で示した方がわかってくれるタイプの人なのか……めんどくさいなあ。

そして、お手というよりは、お乗りって感じだった。

見た感じスライムには手なんてないから、自ずとそうなるってしまふのはわかるけれど……。

「にんげんなのにころさるきないしー、とてもーでもいいにんげんなのねー」

スライムがニコニコと微笑みながら、自分の体を女戦士の手にスリスリしている。

か、可愛い……そして、うらやましい……。

「何ですか、こいつ急に、私の手を溶かして食う気ですか。勇者さん翻訳」

「とてもいい人間だって、関心してるみたいだよ」

「関心？」

「たぶん、人間〓殺される、って思ってたみたいだから」

「まあ、間違っではないですけどね」

「……………」

女戦士のスライムを見る目が　まあ目は確認できないんだけど

みるみるうちに殺気に変わっていくような気がして、

「スライム逃げてー！！」

と力一杯に叫ぶ。

「え、なんでー？」

そんな殺気にもボクの心配にもまったく気づかない能天気スライムは、逃げるどころか女戦士の肩にまで登っていた。

そして頬擦り。

「何ですか、こいつ。地面に叩きつけて潰していいですか」

「ダメー！！　なついてるんだよ！」

「私には上から目線で『パン買ってこいや』と言ってるようにしか見えません。異様にム力つきます」

「お願いだから気を落ち着けて！」

女戦士は肩に乗っかるスライムを握ると、腕を大きく振りかぶる。やっぱり、ボクの説得は意味がないのか……。

「たかいたかいー!?」

スライムは楽しそうだ。

この無邪気な笑顔が、鬼畜女に壊されようとしているのか……ん？でも、何か、おかしいぞ。

スライムは人間の言葉がわかるから、女戦士の言っている言葉やろうとしていることは、わかってもいいはずなのに。

それなのに、楽しそうに笑っているというのは、一体、どういうことなんだろう？

「……………」

女戦士は振りかぶった腕を止めたまま、微動だにしくなる。

何かを考えるような　そんな間をあけてから、スライムを解放して地面に置いた。

「勇者さん」

「え……あ、何？」

「さつき、このスライム、人間〃殺されるって思っていたとか言いましたよね？」

「ああ、うん。そうだけど」

「人間を見て最初に思うことが殺されるって、この魔物の心にそれが染みついているからだと思うんですよ」

……確かに。

人間は自分たちを殺すものだとして認識していたからこそ、咄嗟にあらんなことを言っていたんだろう。

その認識が魔物としての遺伝なのか、スライムの過去に何かあったのかまではわからないけれど　それは何だが、人間の身としては、心が痛むし、とても悲しい　切ない気持ちになる。

「でも、このスライムは、私が本気で殺気を放つても、震えたり、臆する様子はまったくなかった。ただ鈍感なだけなのか　しかし、



殺気を感じれないというのは、どれほど弱くて儂く、どれほど無邪気で純粋な心があるというのでしょうか」

意外だった。

ただの鬼畜女と思っていたけれど、何も考えずに暴虐の限りを尽くすひどい人だと思っていたけれど。

実はそんなことはなかったのかもしれない。

彼女はただ、冷静に物事を見定めていただけなのだろうか。

「どうします？」

「え？」

「このスライム」

女戦士が指差した先で、スライムがプヨプヨと動いている。

「仕方がないのでこのまま何もしないのも良しとしますが、このまま何もしないでいれば、いつか必ず、殺されますよ　人間に」

あの6人の勇者は、まだここには来てないのか、もう先に行ってしまったのかはわからない。

まだここには来てないとしたら、いつかはここを通り、このスライムと遭遇する可能性もあるだろう。

そうしたら　人間として、勇者として、魔物は倒して行くかもしれない。

殺されてしまうかもしれないんだ。

「……ほっとけないよ」

「だから、どうしますかと聞いてるんです」

「……あ」

それは、ボクが勇者として、このパーティのリーダーとして、決めるてはいけないうことなのだ実感した。

「……うん。じゃあ、連れて行く」

スライム　つまり、魔物と関わるということは、勇者としてはいけないことかもしれないけれど　そんなことは関係ない。

大事なのは、勇者<sup>ボク</sup>の意思だ。

そうしたい　と今決めた。

「スライムを仲間にしよう」

ボクみたいなのが勇者で、変な女に無理矢理旅に出されて、魔物であるスライムを仲間に入れた　そんな不思議パーティが結成されてしまった今日この頃。

青空はどこまでも澄んでいて、魔王が復活したとは思えないような　いや、魔王が復活していたとしても、今日は、とても天気の良い日だった。

「名前はポチにしましょう」

「犬じゃん!」

「わんわんー!」

「あれ、意外と気に入ってる……?」

……とはいえ、まだまだ今日というこの日は続くのである。

#### 4ページ目「スライム」(後書き)

感想：いいにんげんはすきなのね！？  
て手がないんじゃない？

……あれ、スライムっ

5ページ目「勇者さん、特訓する」(前書き)

題名：勇者さんの珍道中

著者：ハーシェリン      名前が微妙に違う!?

## 5 ページ目「勇者さん、特訓する」

私と勇者さんの旅に、新しい仲間      スライムのポチが加わりました。

「きゅきゅー！」

「ポチがベタベタしてきて気持ち悪いのですが、やっぱり始末してもいいですか？」

「だ、だからダメだってば！ 君のこと、気に入ってるだけ何だからさ……」

勇者さんがさっきから私の方をチラチラと見つめてくる。

「あ、もしかして、嫉妬とかしてますか？」

「べ、別に……」

「安心してください。私、別にポチのこと好きじゃありませんから」「いや、だから、別にしてないって」

「え？ だって勇者さん、私に惚れてるんでしょう？」

「凄まじい勘違いをされているようだ……」

「私ではないとすると……まさか勇者さん、スライム魔物が好みだったんですか？ マニアック過ぎてさすがについてけませんよ」

「確かに愛情は持つてるつもりだけれど、そういう意味で好きなのはまた違うから！ 普通に考えたらわかるでしょ！？」

「でも、勇者さんの感性って、普通とはかけ離れてるじゃないですか」

パジャマの趣味の悪さもそうですけど、スライムを可愛いとか言っちゃうような人を、普通は普通とは言いません。

「ちゃんと家に帰れたらまともな格好もできたはずなのに、誰かさんのせいで……」

「私が悪いみたいな言い方ですね」

「自覚ないんだ……」

「勇者さんはわかってないだけですよ」

「わかってない？」  
「誰だって最初は初期装備です」  
「パジャマがボクの初期装備!？」  
「私と出会ったときに着ていたのでそうなりますね」  
「あくまでも自分基準なんだ……」  
「この世界に自分以上に大切なものなんてあるんですか？」  
「う……また答えづらいことを……」  
「即答できないということは、勇者さんも自分が一番大切なクズ人間側ということですかね」  
「……そういう女戦士はどうなんだよ？」  
「私がクズに見えるとでも？」  
「違うとでも？」  
「違いますよ。私はレズです」  
「何そのいきなりすぎるカミングアウト!？」  
「やだなあ、冗談ですよ」  
「……うん。まあ、どっちでもいいけどさ」  
「は？ 私がもし冗談じゃなくレズだとしたら、勇者さんとのフラグがなくなるんですよ？」  
「……女戦士の方がボクに惚れてたりして……」  
「冗談は顔だけにしてください。この童顔」  
「年相応だよ!」  
「そういえば勇者さんって、7人の勇者の中では間違いなく最年少ですよ」  
「あの鎧着た人たちの年齢なんて知らないよ……顔も見えてないし」  
「そうですか。私は知ってますけどね」  
「え、そうなの？」  
「そりゃそうですよ。王宮道化師やってたんですから。城に集められた勇者たちの顔ぐらいちゃんと見てます」  
「そもそも何であの鎧なの？」  
「あれは王様の趣味です」

「趣味!？」

「各勇者に贈られた装備で、王様が勇者たちを見送る際に着るよう言われていたものです。ちなみに呪いがかかって声が出せません」  
「何で呪われた装備で!？ そんなにカッコイイとは思えなかったけど!？」

「だから、王様の趣味ですって。王様はあれがカッコイイと思ってるんですよ。笑ったら極刑ですよ」

「極刑!？」

「私はこっそり笑っちゃいましたけど」

「別に笑える装備でもなかったよ!？ ていうか極刑はどうした!？」

「大丈夫です。王宮道化師なんて、常に笑ってるようなもんですから」

「そのフードの中でピエロのメイクでもしてんの!？」

「してませんよ、そんなもの。勇者さんはピエロ女がお好みなんですか？ 特殊ですね」

「話を勝手に飛躍させないで!」

「……あれ？ そういえば、勇者さん。結局は何の話をしてたんですか?」

「勝手に話を方向転換しまくった拳句にその発言はどうなの!？」

「まあ、いいです。私が最初から言いたかったことだけはちゃんと覚えてますから」

「言いたかったこと？ なら早く言えばいいのに……」

「スライムを倒したくないという勇者さんを他の方法でレベルアップさせようかと思ひまして」

「他の方法？ どうするの?」

「決まってるじゃないですか」

本当に何もわからないというような顔の勇者さん。

やることは決まっているというのに、愚かしいことこの上ない。

「特訓ですよ」

その特訓は、夕日が見え始める頃まで続けました。

「だらしないですね、勇者さん」

「ハア……ハア……いや、ハア……だって……ハア……無理、だよ……ハア……こん、な……ハア……」

「たかが数時間、私と打ち合っただけで何をそんなにハアハア疲れてんですか」

「5時間も6時間も大人と打ち合いして疲れない子供がいるのかという疑問に対する答えを先に言えー!」

「意外と元気じゃないですか」

「……も、もう、無理……」

今の叫びで力を使い果たしたのか、勇者さんはその場に仰向けに倒れてしまいました。

……あ、気絶してる。

少々やりすぎてしまいましたかね。

しかしこれで勇者さんのレベルも少しは上がった　　ような気がしますし、結果オーライです。

「きゅー?」

「殺したわけじゃないですよ。朝になれば目を覚まします。　　今

日は、野宿でもしておきますか」

「きゅきゅーい!」

ポチと二人きりじゃ、文字通り話にならないので、今日はこの辺



にしておきます。

## 5ページ目「勇者さん、特訓する」(後書き)

感想：死ぬかと思ったよ……。

チッ……生きてましたか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9238x/>

---

勇者さんの珍道中

2011年11月12日03時13分発行